

北海道の縄文文化

Hokkaido Jomon Culture



<発行>

北海道環境生活部文化・スポーツ局 文化振興課 縄文世界遺産推進室
札幌市中央区北3条西6丁目 Tel:011-231-4111

<関連のURL>

「北海道・北東北の縄文遺跡群」 <http://jomon-japan.jp>
「北海道歴史・文化ポータルサイト」 <http://www.akarenga-h.jp/hokkaido/jomon/j-01/>
「北海道縄文世界遺産推進室ウェブサイト」 <http://www.pref.hokkaido.lg.jp/ks/bns/jomon/index.htm>



北海道の縄文文化

はじめに

縄文文化は約15,000年前から2,500年前まで一万年以上にわたり日本列島全体に展開した先史文化です。当時の人々は、厳しくも豊かな自然に謙虚に向き合いながら、狩猟・漁労・採集を生活の基盤とし、共生と循環の思想のもと心豊かに暮らしていました。

特に北海道においては、日本列島の大部分が水稲耕作を基盤とした弥生文化に移行した後も農耕を本格的に採用せず、続縄文文化、オホーツク文化、擦文文化などを経てアイヌ文化へと続く独自の歴史が展開しました。そのため、「自然への畏敬の念」や「共生の思想」など、命ある全てのものを尊重する精神が今日のアイヌ文化のなかにも色濃く残っています。

縄文文化の「自然と共生」する心は、現代はもちろんのこと、これからの社会のあり方を考えるうえでも普遍的な価値を含んでいます。この小冊子は、こうした縄文文化の重要性に対する理解を深めるとともに、北海道の歴史の特徴と魅力を探り、発信するために編集したものです。

もくじ

はじめに	
北海道の地理的環境	2
旧石器時代とその終焉	4
温暖化と縄文文化の始まり	5
縄文文化の位置づけと特徴	6
北海道の縄文文化	8
世界の先史文化における縄文文化の特徴と価値 (Simon Kaner)	14
世界文化遺産の登録をめざして	16

写真
上:土面 ママチ遺跡(千歳市)重要文化財
左:土偶 著保内野遺跡(函館市)国宝
右:土偶 美々4遺跡(千歳市)
中央下:動物形土製品 美々4遺跡(千歳市)重要文化財



北海道の地理的環境

【現在の北海道】

北海道はアジア大陸の東に伸びる日本列島の北端に位置しています。日本海、オホーツク海、太平洋に囲まれ、北は宗谷海峡を隔ててサハリン島と、南は幅わずか約19kmの津軽海峡を挟んで本州と向き合っています。この津軽海峡には暖流である対馬海流の分流(津軽暖流)が、毎時約3ノットで日本海から太平洋に流れており、地元では「しょっぱい川」とも呼ばれています。

北海道は北海道本島の他に、利尻島、礼文島、奥尻島などの島々で構成されています。北海道本島の面積は77,984.41km²と广大で、現在の植生分布を見ると、日高山脈など北海道の中央を走る山々を境として、南西部は落葉広葉樹林、北東部は北方針・広混交林と大まかに分かれています。



北海道と周辺の地域

この地図は国土地理院の電子地図を使用。

【縄文以前の北海道】

初めて北海道に人類が住んだのは、今から約3万年前の旧石器時代です。この頃は更新世後半の最終氷期にあたり、海水面は現在より100mほど低下していたため、日本列島は今とは異なる地形を呈していました。本州は四国、九州と陸続きになった“古本州島”を形成し、北海道はアジア大陸と陸続きになったサハリンとつながり、大陸北東部に突き出た半島の一部になっていました。約2万年前に最寒冷期を迎えると、平均気温は現在より7～8度も低くなり海水面も130mも低下しますが、津軽海峡は最も浅いところでも深度が140m以上あるので、北海道島と古本州島は海で隔てられたままでした。そのため、現在でも北海道の動植物相は、津軽海峡を越えた本州よりもアムール川下流域などに近い分布になっています。また、対馬海峡はほぼ閉じていたため、日本海は大きな湖のようになっていました。

気温が低かったことにより、植生分布も現在とは異なり、南西部が常緑針葉樹林、北東部は落葉針葉樹林であったと推測されています。



約2万年前の北海道周辺の地形

この地図は国土地理院の電子地図を使用。

旧石器時代とその終焉

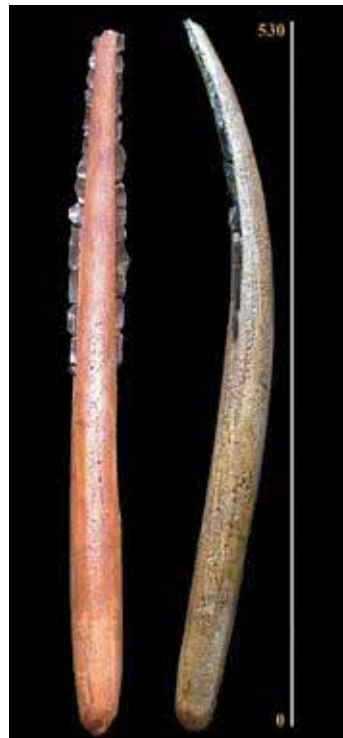
旧石器時代の人々は、マンモスやヘラジカなどの大型動物を追いかけながら移動生活をしていました。北海道で最も古い遺跡は約3万年前のもので、後期旧石器時代に属しています。

すでに述べたようにこの時期は最終氷期に当たりますが、なかでも最寒冷期となる約2万年前から「細石刃」という石器が急速に増え、温暖化が始まる1万5千年前を経て1万2千年前まで盛んに使われました。細石刃とは長さ3~5cmの細長い剥片を木製や骨製の柄の両側に溝を彫って列状に複数取り付け、狩猟用の槍などとして使ったものです。少量の石材から大きな利器を作ることができ、また植えた刃の部分を取り換えれば切れ味の蘇る大変便利な道具でした。シベリア周辺では北海道よりも古い段階の細石刃が多く分布することから、大型動物を追いかけながら、アジア大陸と陸続きになっていたサハリン島を南下し、半島の一部になっていた北海道島に人々が移動してきたと考えられています。

一方、このような北ルートとは別に、列島の西の九州側にもやや遅れて約1万5千年前に細石刃が入ってきます。そして、その後訪れる急激な温暖化と環境の変化にともない、主にこの細石刃文化を母体として縄文文化が日本列島で生まれました。



細石刃(上段)と細石刃核
畷遺跡(帯広市)撮影:佐藤雅彦



細石刃が埋め込まれた植刃器
熊の悲劇洞窟(サハリン)

写真の出典: Vasilievski Alexander 2008, Мамонтовая фауна и адаптация человека на Сахалине. Human Ecosystem Changes in the Northern Circum Japan Sea Area in the Late Pleistocene. The University of Tokyo, PR44-67 及び Vasilievskiy A.A., Высоков М.С. 2012, Сахалин и Курильские острова. История с древнейших времен до образования Сахалинской области. Южно-Сахалинск: изд-во «Рубеж», 320с.

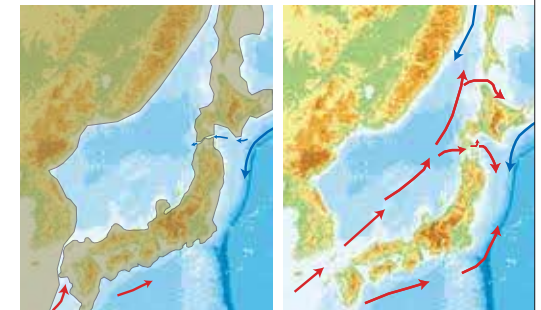
温暖化と縄文文化の始まり

地球の歴史を見ると、寒冷な「氷期」と温暖な「間氷期」を数万年周期で繰り返しており、約1万5千年前からベーリング/アレレードと呼ばれる急激な温暖化の時期を迎えます。

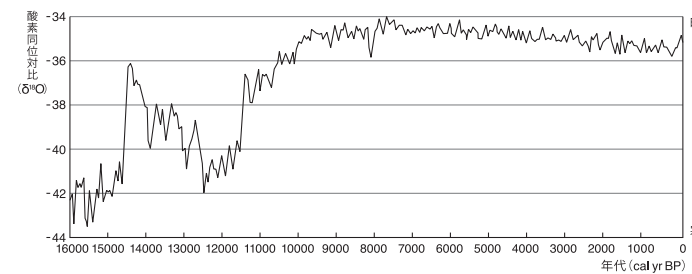
この温暖化によって海水面が一気に130mも上昇し、北海道とサハリンは大陸から離れて島となります。また、氷期にはほぼ閉じていた対馬海峡が大きく開き、湖の状態だった日本海に暖流の対馬海流(黒潮)が大量に流れ込んで北上します。また、日本海に流れ込む海流の量が多いため、溢れた暖流が北海道と本州の間の津軽海峡を通して太平洋に流れて本州北部の東岸沖を南下し、一方は北海道渡島半島の南東部を北上するようになります。

温暖化による海水面上昇と潮流の流れの変化は、日本列島の自然環境の形成と縄文文化の萌芽を考えるうえで重要な要素です。暖流は海面の表層を流れるので、そこから生じた水蒸気が列島に雨や雪を降らせ、温暖・湿潤で四季がはっきりした気候が形成されました。山々には緑豊かな森林と小河川が形成され、また海水面上昇とともに潮流が活発化したことにより、近海には様々な海洋生物が息するようになりました。狩猟・採集・漁労を生活の基盤とする縄文文化は、こうした生物多様性に満ちた自然環境の形成とともに発生することになります。

地球規模で見ると、北米大陸やヨーロッパではヤンガー・ドリアス(12,900年前-11,500年前)と呼ばれる寒冷化が再来しますが、日本列島は暖かい対馬海流に囲まれていたためか、北半球の他地域に比べ、劇的な寒冷化は確認されていません。暖流に囲まれ比較的安定した環境が維持されたことが、縄文文化の形成においても幸いしたのかもしれない。



この地図は国土地理院の電子地図を使用。
約2万年前(左)と縄文時代以降(右)の海流
*赤:暖流(対馬海流) 青:寒流(親潮)



北グリーンランドの氷柱
コアから想定される気候
変動の模式図

縄文文化の位置づけと特徴

【世界史的な位置づけ】

縄文文化の名前にある「縄文」とは、この時代の土器の多くに縄目の紋様が付けられていることに由来します。縄文土器の形や紋様には優れた芸術性が認められ、時期や地域によっても多様な変化がみられます。

縄文文化の始まりは、この土器の使用と定住化の実現をもって定義されます。現在、最古級の土器には青森県大平山元遺跡出土のものがあり、放射性炭素による年代測定の結果、約1万5千年前の値が得られています。一方、縄文文化は、穀物の栽培を主な生業とする弥生文化に置換される形で終焉を迎え、その年代は約2千5百年前と考えられています。

世界史のなかで位置づけると、例えばヨーロッパにおける旧石器時代の一部から新石器時代、青銅器時代を経て鉄器時代にまで及ぶ長大な時間が縄文時代の存在した年代に相当します。また、土器や磨製石器の使用、あるいは定住化の実現という文化要素で見ると、縄文文化はユーラシアの新石器文化と対比されます。



縄を転がして縄目紋様をつける

	B.C.13,000	B.C.9,000	B.C.5,000	B.C.3,000	B.C.2,000	B.C.1,000	B.C.300	A.D.300	A.D.600	A.D.800	A.D.1,200
日本	旧石器時代	縄文時代					弥生時代	古墳時代	飛鳥時代	平安時代	鎌倉時代
		草創期	早期	前期	中期	後期					
北海道	旧石器時代	縄文時代					続縄文文化	擦文時代		アイヌ文化期	
		草創期	早期	前期	中期	後期		晩期	オホーツク文化		トビニアイ文化
西欧	旧石器時代	中石器時代	新石器時代	青銅器時代	鉄器時代	ローマ帝国					

【縄文文化の特徴】

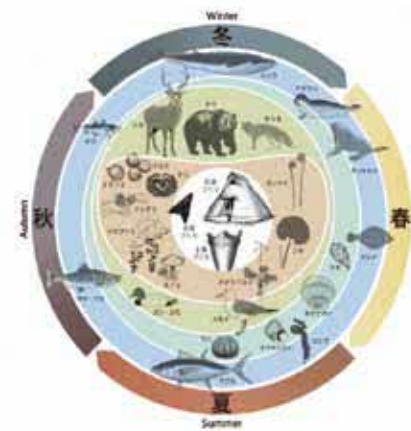
縄文文化の最大の特徴は、単に長期間存続しただけでなく「1万年以上も自然と共生しながら定住生活を実現した」点にあります。

ユーラシア西部の主な新石器文化をみると、概ね農耕・牧畜の開始とともに定住生活に移行していますが、そこで定住の開始とともに森林の消滅が始まったのとは異なり、縄文文化は自然環境を大きく改変することなく、狩猟・採集・漁労を基盤として長期間の安定した暮らしを実現しました。また、縄文文化が存続した1万年間には何度か大規模な気候変動が起こり、火山噴火や地震等の大きな災害もありましたが、当時の人々は巧みに環境に適応し、縄文文化の伝統を維持しました。

こうした自然との関わりのなかで、この文化に固有の文化的伝統も生まれています。植物繊維を使って籠などを作る編組技術、ウルシの樹液を採集・精製・加工する漆工技術は、植物の特性を熟知しなければ成立しない大変高度なものです。また、実用的な道具だけではなく、粘土で人形を造形した“土偶”も作られました。命の再生や循環を願っていたものと思われ、高い精神性が窺えます。



縄文時代中期の円筒土器



縄文カレンダー（小林達雄氏作成の図に加筆）
四季による生業のようすを示す



クリ



シカ



ウニ



クジラ



マグロ・ヒラメ

遺跡から出土した当時の食料

北海道の縄文文化

【最古の土器と定住】

北海道で最も古い土器は、道東部の大正3遺跡(帯広市)から出土したもので、放射性炭素による年代測定で約14,000年前という年代値が得られています。この土器は乳房状の突起を持つ丸底の形をしており、縄目ではなく、爪形の紋様が施されています。この形と紋様の特徴は本州の土器に共通していることから、初期の縄文文化においては、北海道東部に至るまで本州とほぼ均一の文化要素が広がっていた可能性を示しています。北海道ではこの段階の住居跡はまだ見つかっていませんが、列島の各地ですでに竪穴式住居が出現していたことが知られています。



北海道最古の土器 大正3遺跡(帯広市)

【集落と貝塚の形成】

ヤンガー・ドリアスの寒冷期が去った約9,000年前になると、竪穴式住居で構成された集落が各地で確認されるようになります。道東部の八千代A遺跡(帯広市)や道南西部の中野B遺跡(函館市)では多くの竪穴式住居跡がまとまって発掘されるなど、すでにこの時期には恒常的な定住地が形成されていたことが分かっています。



約9,000年前の集落跡 中野B遺跡(函館市)



貝層の堆積状況 北黄金貝塚(伊達市)

その後、6~7千年前に温暖化のピークを迎えると、海水面の上昇と内水面の拡大により漁労が一層発達し、道東部の東釧路貝塚(釧路市)、道南部の北黄金貝塚(伊達市)や入江貝塚(洞爺湖町)のような貝塚を伴う集落が増加し、さらに5,500年前頃から大船遺跡(函館市)のように大型の竪穴式住居が密集した大規模な集落も形成されるようになります。

貝塚とは食料とした貝殻や動物の骨などが堆積した場所で、当時の食料資源や自然環境が反映されたタイムカプセルのようなものです。また、墓地としての機能もあり、当時の社会や精神文化を知る貴重な情報の宝庫となっています。

【地域文化圏の発達】

縄文文化は北海道から沖縄本島まで日本列島全体に広がっていました。しかし、それは画一的なものではなく、7~8の地域文化圏に分かれていたことが分かっています。今日でも日本の各地にはそれぞれ独自の地域文化が認められますが、縄文時代においても使われる縄文土器の形や紋様が各文化圏単位で異なるなど、一定の範囲で地域文化圏が形成されていたようです。

北海道を地理的にみると、北東部はサハリン島や千島列島などを通じて北方世界と接し、南西部は津軽海峡を挟んで本州と向き合っています。このことから、古来、北海道は北と南の文化が流入し交差する舞台になっていました。また、森林植生の相違も北海道の縄文文化の発展のあり方に影響を与えたと考えられます。落葉広葉樹林が広がる南西部には、ほぼ同じ植生をもつ東北地方を中心に発達し、クリの栽培などを伴ういわゆる「円筒土器文化」が6,000年ほど前から流入し、津軽海峡の両側に南北約500kmに及ぶ広大な文化圏を形成しました。これは他の縄文時代の地域文化圏に比べて広域で安定したものであり、先史時代における文化圏内の価値観の交流を示す顕著な事例として注目されます。



大型の竪穴住居跡 大船遺跡(函館市)



縄文時代の地域文化圏

【巨大な記念物の出現】

4,000年前頃には、北海道の南西部で大規模な記念物が出現します。道南部の鷲ノ木遺跡(森町)では外径37mの環状列石が見つかっており、東北地方北部と一体の文化圏であることを実証する貴重な記念物として知られています。

一方、道央部では3,500年ほど前に巨大な周堤をもつ集団墓地群が出現します。周堤は円形の埋葬用の竖穴を掘った土を周囲に盛上げたもので、キウス周堤墓群(千歳市)では、最大で外径が75mに及ぶものがあります。こうした形態の集団墓地は石狩低地帯を越えて道東部(斜里町朱円周堤墓)まで広がりを見せるが、本州には見られないもので北海道特有の記念物です。



環状列石の調査 鷲ノ木遺跡(森町)



周堤墓の調査 美々4遺跡(千歳市)

【技術と文化の伝播】

狩猟・採集・漁労を生活基盤としながら、当時の人々は地域文化圏を越えて交流・交易を活発に行っていました。最も盛んになるのは後期で、ヒスイ装飾品、漆製品の他、接着剤として使用したアスファルト塊なども本州から北海道に運ばれています。一方、道東産の黒曜石が本州北部の三内丸山遺跡(青森市)から出土するなど、北から南に運ばれたものもあります。

大陸との関係をみると、7,000年前頃には「石刃鏃」という特殊な石鏃が北方から伝わって道東北部を中心に広がり、一部は道南西部に達するなど、大陸に近い地理的条件を反映した文化の伝播もありました。



ヒスイ装飾品 キウス4遺跡(千歳市)



漆塗り櫛
カリンバ遺跡(恵庭市)
重要文化財



赤彩注口土器
野田生1遺跡(八雲町)
道指定有形文化財



アスファルト付着鋏先
船泊遺跡(礼文町)
重要文化財



土器に入ったアスファルト塊
豊崎N遺跡(函館市)



石刃鏃文化の石器群 湧別市川遺跡(湧別町)

【精神性を示す遺物】

縄文文化の精神性を表す代表的な遺物に「土偶」があります。初期は乳房だけ付けた女性像として作られ、中頃には妊婦の姿を現したものに変わることから、命の誕生や再生の願いを表したと考えられています。しかし、後半になると髭や扁平な胸など男性的な要素も加わり両性的な造形になります。また、多くの土偶が意図的に壊されて出土します。このことは“死”をイメージする破壊が、再生(生)の始まりとする縄文の思考を示しているのかもしれませんが。

6,500年ほど前の墓から幼児の足形を押しつけた粘土板が出土することがあります。これらは北海道特有の遺物で、幼くして亡くなった子どもの足形を押しつけたものと考えられています。また約5,000年前以降、石刀や石棒と呼ばれる遺物も出土しています。これらは子孫繁栄の象徴として男根を模して作られたと考えられています。こうした祭祀や儀礼を示す遺物を見ると、命を尊び畏敬する縄文人の思いが感じられます。



上:土偶 西島松5遺跡(恵庭市)
下:板状土偶 フコッペ貝塚(余市町)



足形付土板と副葬された石器 豊原4遺跡(函館市)重要文化財



周堤墓から出土した石棒と土器
朱円周堤墓群(斜里町)道指定有形文化財

【縄文以降の北海道】

気候変動や大規模な災害などの環境変化にも巧みに適応し、1万年以上も存続してきた縄文文化でしたが、約2,500年前に突然その終焉を迎えます。要因は、朝鮮半島や中国長江下流域から九州北部に水稲耕作が伝わり、これを中核的な生業として鉄器や各種穀物の栽培を伴う弥生文化が急速に日本列島の大部分に広がったことにあります。

これ以降、縄文時代から数千年に渡って維持されてきた北海道南西部と東北地方北部の地域文化圏は解消し、北海道側のみ「続縄文文化」として知られる、縄文文化の伝統を強く残した狩猟採集民の文化が栄えました。また、本州の古墳時代の中頃にあたる5~7世紀には、サハリンから海獣猟や漁労に特化した「オホーツク文化」が北海道北東海岸を中心に広がり、道南の奥尻島まで進出するようになります。さらに、本州以南に中央集権的な政府が成立した7世紀頃になると、アワ・ヒエなどの雑穀農耕を取り入れた「擦文文化」が成立し、その後「アイヌ文化」が出現することになります。道内の北東部を中心にこうした縄文文化以降の竪穴式住居群が窪みのまま残っている遺跡が多く知られており、北海道特有の歴史を今に伝える重要な文化遺産として保存されています。

このように、北海道には日本のメイン・ストリームとは別の、もう一つの歴史が流れているのです。



窪地に残る竪穴住居群 シブツノナイ竪穴住居跡(湧別町)



オホーツク文化の遺物 松法川北岸遺跡(羅臼町)
重要文化財 撮影:佐藤雅彦



樹皮衣*アイヌ語でアットウシ
(公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構蔵)



世界の先史文化における 縄文文化の特徴と価値

サイモン・ケイナー (英国イースト・アングリア大学日本学研究所所長)

日本列島における縄文時代の考古学は、世界の先史学にとって非常に重要です。しかし主に言葉の壁のため、世界的にはまだその本当の価値に相当する影響力を持っていません。その意味で、北海道南部と北東北地方のみごとな

縄文遺跡群をユネスコの世界遺産に推薦することは、そうした現在の状況を是正するために役立つでしょう。

縄文遺跡の最初の報告は19世紀にまで遡り、それ以来、縄文時代の考古学は世界的に大きな関心を生んできました。1877年にエドワード・シルベスター・モースが行った大森貝塚の調査は、日本の遺跡を扱ったものとしてははじめて、学際研究や対訳にも配慮した本格的な考古学調査報告を生み出したばかりでなく、「イラストレイテッド・ロンドン・ニュース」—それは19世紀のCNNともいべきものですが—などを通じて広く報道されました。またニール・ゴードン・マンローが、1908年に日本の考古学に関する初めての記念碑的な概説書『先史時代の日本』を出版したときにも、縄文遺跡に大きな注意が払われました。

20世紀後半の考古学ブームは、疑いもなく、温帯における狩猟漁撈採集民の考古資料として世界で最も豊富な記録の成果です。それはいくつかの並外れた記録、つまり、集落、祭祀遺跡、墓地、驚くほど自然遺物が保存された湿地遺跡、洞窟や岩陰遺跡、原産地遺跡、加えてモースによる最初の報告のような数千の貝塚の完全な発掘調査です。

日本列島の縄文人の業績には計り知れない意義があります。例えば、農耕を選択する遙か以前、中近東やヨーロッパより数千年も早く、世界最古として知られる15,000年前の大平山元遺跡の土器です。また垣ノ島B遺跡で明らかになった約9,000年前の漆の利用は、西洋の考古学者が時折使う「アフォーダンス」という生態心理学の概念、つまり彼らと彼らが入手できる素材(環境)との詳細な関係性について証明しています。最も大規模な集落であり、1500年以上という同時代の世界のどんな都市よりも存続した三内丸山遺跡(青森市)を含め、彼らは桁違いに集落に長期間住んでいました。

縄文人は土器づくりにおいて特筆すべきデザインセンスを発揮しました。最も初期の土器でさえ、繊細な粘土紐の隆線紋様など、際だったデザインで装飾されています。2009年にロンドンの大英博物館で開催した縄文土偶の展覧会(The Power of DOGU)では、まるで現代の造形のように見える多くの土偶について、何千年も前に作られたものとは信じがたいと多くの来訪者が発言していました。この高度に発達したデザインセンスは、土器づくりの卓越した技術に支えられており、それは、著保内野遺跡(函館市)で

地元の主婦が農作業中に偶然発見した“カックウちゃん”と呼ばれる中が空洞に作られた土偶(中空土偶)が明確に示しています。

縄文人は、この世の中における自分たちの位置、あるいは別の世とのつながりにおいても、とても素晴らしく発達した感覚を明確に持っていました。それを示す一例が、環状列石、配石遺構などの石造りの記念物です。ニール・G・マンローは、港町である北海道小樽市の郊外にある“忍路環状列石”に好奇心をかき立てられました。それ以来、日本の考古学者は素晴らしい秋田県の大湯環状列石や伊勢堂岱遺跡、青森県の小牧野遺跡など石造りの記念物を幾百となく調査してきました。ただ典型的なストーン・サークルとして知られる英国のストーンヘンジのように、そうした記念物には、天体の運行との関連は何か、死や埋葬に関するものか、季節的な儀式あるいはその両方なのかなど、まだ多くの謎が残っています。これらの謎めいた遺跡は、考古学的調査を通じて視覚的なモニュメントとして慎重に復元されており、現代の人々がすぐに行ってみたくになります。一方、トンネル工法で保存した鷲ノ木遺跡(森町)が示すように、時には開発事業に直面し、考古学者は遺跡の保存を確保するために長い時間かけて努力することもあります。

これらの遺跡やモニュメントは、縄文集団が、知的にも現在の人間と全く同様であり、その独自の文化的な洗礼による表現の相違はあるものの、感情や能力においても私たちが同じだったことのある確かな痕跡です。彼らがどのように話したか再現することはできませんが、彼らは間違いなく、彼らを取り巻く世界を表現するための多くの概念を創造し、豊かな言語を持っていたに違いありません。縄文考古学の研究は、同じ日本列島で現在の私たちと違った生活、別の暮らしを営むとしたらどんなものか、それを垣間見せてくれます。そして多分そのことが、縄文が現在も魅力を持っている理由の一つなのでしょう。

北海道南部と北東北地方に存在する一連の縄文遺跡群をユネスコの世界遺産として登録しようと目指すことは、世界の先史学や現代社会のために、縄文文化の意義を再検証する機会の到来です。遺跡を解説する新しい施設も多くできており、際だって優れたディスプレイ、そして日本語だけでなく英語による解説は、現代の来訪者にとって最高の案内となります。2020年の東京オリンピック・パラリンピックでは、世界の目は

かつてないほど日本に注がれます。これは、誰もが縄文時代の遺跡の優れた普遍的価値、そして人類の歴史における重要性について理解できる、新しい方法で縄文文化の素晴らしさを示す機会—世界の先史時代における縄文の意義を見直し、現代社会のなかで縄文の価値を見直す機会—の到来になります。

縄文遺跡群は、ヨーロッパのどの大聖堂とも対等の価値があり、フランスの後期旧石器時代の洞窟壁画にも匹敵する重要な価値を持つものなのです。



世界文化遺産の登録をめざして

自然環境の保全が重要課題となっている現代社会において、環境を大きく改変することなく、自然と共生しながら1万年以上続いた縄文文化には、私たちが学ぶべき多くの価値と貴重な示唆が含まれています。

そのため、北海道と青森県、岩手県、秋田県は、北海道南部と東北部の縄文遺跡群について、ユネスコの世界文化遺産の登録をめざして共同で取り組んでいます。この地域では、本格的な定住の始まりから縄文文化の終わりまで大規模な集落が形成され、環状列石などの記念物もつくられました。また津軽海峡があるにもかかわらず交流を続け、共通の地域文化圏を長期にわたって維持していたという特徴があるなど、世界の先史狩猟採集民の残した遺跡群のなかでも異彩を放つ縄文文化の価値を代表しています。



北海道の構成資産

- 垣ノ島遺跡(函館市)**
 約8,000~3,000年前の集落跡。4,500年ほど前には土器や石器など道具の廃棄や儀礼を行った長さ160mを超える「コ」の字形の盛土遺構がある。
- 大船遺跡(函館市)**
 約5,000~4,500年前の集落跡。深さ2mを超える竪穴住居跡など大型住居群が密集し、クジラやオットセイなど当時の食料となった海産資源が出土している。
- 入江・高砂貝塚[入江](洞爺湖町)**
 約5,500~4,000年前の貝塚を伴う集落跡。子どもの頃ポリオに罹った成人男性の遺体が発見されており、成長するまで長期間の介護を受けていたことが分かる。
- 入江・高砂貝塚[高砂](洞爺湖町)**
 約4,200~2,500年前の貝塚を伴う集落跡。内湾近くの段丘に立地し、当時の環境や生業活動の実態を示している。
- 北黄金貝塚(伊達市)**
 約6,000~5,500年前の貝塚を伴い4,500年前頃まで続いた集落跡。漁労を中心とした生業の実態を示すとともに、当時の精神性を反映した石器の廃棄儀礼を行った水場遺構もある。
- キウス周堤墓群(千歳市)**
 約3,300年前の巨大な周堤をもつ集団墓地群。周堤は円形の竪穴を掘った土を盛上げたもので外径は最大で75m。竪穴部に複数の墓がある。
- 鷺ノ木遺跡(森町)*関連資産**
 約4,000年前の祭祀・埋葬遺跡。外径37mと北海道で最大級の環状列石が高速道路の建設中に発見され、道路のこの部分をトンネルとしてこの記念物を保存した。構成資産には含まれないが、関連資産としている。

北海道・北東北の縄文遺跡群の構成資産



垣ノ島遺跡



大船遺跡



入江・高砂貝塚[入江]



入江・高砂貝塚[高砂]



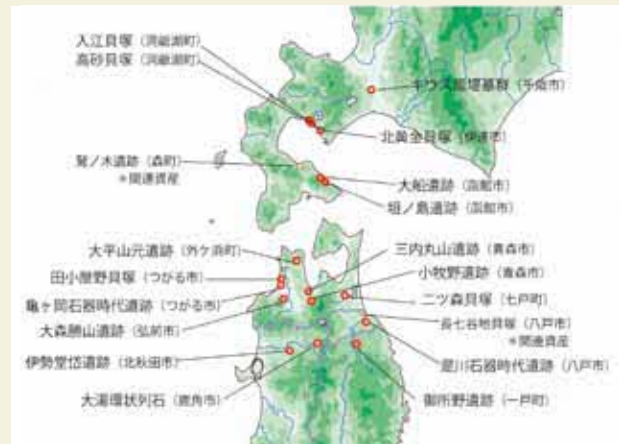
北黄金貝塚



キウス周堤墓群



鷺ノ木遺跡



資料提供：恵庭市教育委員会、帯広市教育委員会、伊達市教育委員会、千歳市教育委員会、洞爺湖町教育委員会、函館市教育委員会、森町教育委員会、八雲町教育委員会、湧別町教育委員会、羅臼町教育委員会、礼文町教育委員会、(公財)アイヌ文化振興・研究推進機構、北海道立埋蔵文化財センター、Александр Василевский